

イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度

イベント名：巣ごもり読書会『だれも知らないイスラエル』

日 時：2022 年 3 月 30 日（水）20:00～21:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：バヴァ（井川・アティアス・翔、戸澤典子）

閉会の言葉：長沢栄治（東京外国語大学）

司 会：濱中麻梨菜（東京大学大学院）

* * * * *

濱中：本日はお忙しい中、巣ごもり読書会にご参加いただきありがとうございます。司会を務めます濱中と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

この Online Book Talk／巣ごもり読書会は、もうすでにおなじみの方も多いかと思いますが、長沢栄治先生が研究者代表を務めておられる「科研費基盤研究(A)イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」が主催のイベントです。

さらに本日は、今年度最後の巣ごもり読書会となります。この巣ごもり読書会は、本や論文などの「書かれたもの」をきっかけに、ホストやゲスト、そして参加者のみなさんがそれぞれ思うところを語り合うというものです。ですので「必ずしも先に本を読んでいなくても、今後読みたくなってもらえればいい」というのをコンセプトにしております。

今日は『だれも知らないイスラエル』の編著者のバヴァさん（井川・アティアス・翔さんと戸澤典子さんのお二人）を語り手にお迎えしております。

* * * * *

まずは簡単に登壇者のご紹介をいたします。

私はパレスチナ／イスラエルのメディア表象に関心を持っていますが、戸澤さんとは大学院のゼミで一緒させていただいておまして、いわゆる先輩後輩の関係性です。戸澤さんが今回取り上げるご本『だれも知らないイスラエル』を出版されたというお話を伺い、今回の巣ごもり読書会の開催が実現いたしました。

バヴァさんのご紹介ですが、今回ご登壇くださる井川さんと戸澤さんが2017年にイスラエルで設立されたグラフィックノベル制作ユニットで、それぞれアカデミックな関心や知識を生かしながら、イスラエル・パレスチナの様々な人々のストーリーにスポットライトを当て、マンガ作りに取り組まれておられます。詳しくはご本の中で「バヴァができるまで」という項でも書かれておられるのですが、お二人はパレスチナへの人道支援を行っている団体でお知り合いになったとのことで、お二人を結びつけたのが中東・北アフリカ系のユダヤ人（通称ミズラヒーム）という存在です。日本人の父とイスラエル人の母を持ちアメリカで育った、ミズラヒームの出自を持つ井川さんと、ミズラヒームのイスラエルでの移民経験に関心があった戸澤さんのお二人が出会い、バヴァが誕生したとのことです。

それでは早速ではございますが、まだ本を手にとられていない方・これから読む予定だという方もおられるかと思うので、バヴァさんからお話いただく前に、私の方でごく簡単にではありますが、本の内容をご紹介します。本の内容は、大きく三つのパートから構成されています。

一つ目のパートでは、先ほど少し触れたバヴァさんの設立の経緯からマンガ制作の手法についての話題にはじまり、続いて、戸澤さんと井川さんそれぞれのバックグラウンドについて語られておられます。

戸澤さんは2人のお子さんを育てる傍ら、大学で学ぶという道を選択され、政治学を中心に学び、その後ロンドンに留学。さらにエジプトに渡るというご経験をされ、そのあとに、現在のご研究内容に関わるイスラエル・パレスチナとの出会いがあったとのこと。井川さんは、先ほど少し触れましたが、日本人の父とイスラエル人の母を持つという「ミズラヒーム」の出自をお持ちとのことで、6歳になる少し前に渡米し、18歳までアメリカ・フロリダ州のマイアミで過ごされ、そして現在はイスラエルにて英語教師として勤めておられます。ご本のなかでもご自身で書いておられますが、日本からアメリカへ、さらにイスラエルへ、という「二重の移民」というご経験をお持ちです。

さらに「イスラエルってどんな国」という章では、「イスラエルらしさ」というのに言及されたあとに、イスラエルの歴史と移民の国イスラエルの人々の暮らしについても書かれており、大変詳細な解説が書かれています。このような詳細な解説がなされている時点で、単なるグラフィックノベル本の範疇を大きく越えたものと思われるのですが、それはまさに「文化の交差点のようなイスラエルに生きる人々の日常は、イスラエルの歴史、さらには世界の歴史と密接に繋がっている」(p.39)という視点を与えてくれるものです。

次に、二つ目のパートでは、いよいよ4つの作品が収録されています。「エルサレム・ビーン」「ただいま」「声たちが見える」「アーク」という4つの作品があるのですが、それぞれに、物語のあらすじ、マンガ、作者解説だけでなく、戸澤さん・井川さんのそれぞれの視点と制作過程の裏話、さらには、作画アーティストとの出会いについてとアーティストからのメッセージが記されていて、バヴァさんのとる制作手法のユニークさというのが伝わってくる内容です。制作手法とその過程については、後ほど詳しくお話をお伺いできるかと思います。

そして「イスラエルの日常を描く」と題された三つ目のパートでは、イスラエルのグラフィックノベルを、自由なマンガ・スタイル、体裁とカラー、出版する場所と言語という3点から紹介したあとに、イスラエル人アーティストへのインタビューとその作品が掲載されています。ここでは4人のアーティストが取り上げられていて、どのインタビューもまず「グラフィックノベルにはどういう強みがあるか」という質問からはじまり、それぞれが作品に対して抱える思いを解き明かしていくというスタイルをとっています。

前置きが少し長くなりました。それでは、お二人をお迎えして、今回はご本に収録されている作品のなかでも、「声たちが見える」という作品を取り上げて、それを中心にお話いただきます。みなさまには、事前配布資料としてお送りしましたので、ご覧いただいているかと思います。では、バヴァさん、どうぞよろしくお願いいたします。

井川：この度は貴重な機会をいただきどうもありがとうございます。本日は『だれも知らないイスラエル：

『究極の移民国家』を生きる』を紹介させていただきます。井川翔と戸澤典子です。どうぞよろしくお願いいたします。私たちのグラフィックノベル制作ユニットはバヴァと呼んでいます。「バヴァ」はヘブライ語で「リフレクション」という意味があります。バヴァの由来は、私たちはイスラエル・パレスチナの様々な人たちのお話を聞いて、その語りからある段階で物語を発想していった、それをイスラエル人アーティストと共にグラフィックノベルに置き換えていくというプロセスがあるのですが、あくまで人々の語りを私たちのフィルター、リフレクションを通して 作品にしていけますので、この過程を考えると、バヴァという名前がぴったりだと思い、命名するに至りました。

『だれも知らないイスラエル』という本につてですが、一体なぜ、イスラエルというとても遠い国のお話を日本に届けたかったのかということについては、2つあります。1つ目は日本のメディアがなかなか触れてこなかった、多様な移民が暮らすイスラエル社会を日本の読者に是非紹介したかったこと。2つ目が、日本は漫画大国ですが、グラフィックノベルという漫画とは異なる手法を物語づくりのなかに表現しながら、日本に紹介したいと考えたからです。

先ほど濱中さんからご紹介いただいた通り、この本には、我々の4つの作品を収録していますが、本日は、その中から抜粋して「声たちが見える」という作品をご紹介します。私たちの4つの作品ですが、1つ目の「エルサレム豆」というものは、世俗派のイスラエル人の女性がある日エルサレムのバス停で年配の宗教者の女性とお話をする機会があって、その短い会話の中で彼女たちの価値観、文化、感覚の違いなどが彼女たちのささやかな日常の中で見える作品になっています。2つ目の「ただいま」というのは、日本生まれで、日米育ちの私がイスラエルの親族とほとんどつながりのない中で、大人になってから初めてイスラエルの出自に関心が行くようになり、イスラエルに住み始め、家族や親戚のライフインタビューを行いました。彼らのモロッコ系ユダヤ人としてのイスラエルでの立ち位置や体験をもっと深く理解するようになって、最終的には自分自身のことも理解するようになっていった、という作品です。3つ目の「声たちがみえる」は、私たちの友人が、ある日特殊な宗教コミュニティを見つけることができ、彼女は其中でリーダーになっていく存在なのですが、ジェンダーの問題なども含まれている実際の話ですので、それを物語の中で表現してみました。最後の「アーク／弧」は、フィクションで、ロシアやウクライナからイスラエルに移民してきた女性たちのインタビューを通して最終的には物語にしました。主人公はウクライナ系のイスラエル人で、ウクライナから移住してきたあとに物理の先生になるという設定で、移住してからだいぶ時間が経った後に、ある日ウクライナから少女が移住してきて、彼女のクラスの生徒になるという設定です。移民時期が違う、先輩と後輩のような関係が築かれていく作品になります。

それでは、これからの流れです。はじめに、「バヴァが目指すグラフィックノベル」とは一体何かについて説明した後に、具体的に私たちが使用している制作手法をご紹介します、その後に「声たちが見える」という作品を共有してから、その中に見えるイスラエルの社会的境界線についてご説明します。そして最後に、イスラエル社会の他の境界線、または全貌に触れながら、イスラエル社会のもっと深い部分をお話していきたいと思います。

今日の流れ

1. バヴァアが目指すグラフィックノベル
2. 制作手法
3. 「声たちが見える」の境界線
4. イスラエル社会の境界線
5. おわりに



6

戸澤：まず私たちバヴァアが目指すものは、多様な人々がいる社会で、異なる文化を持つ「他者」と出会う、また、「他者」を理解する機会を創造するようなグラフィックノベルを提供したいと考えています。多様な人々がいる社会というのは、決してイスラエルだけではなく、とうぜん日本であれアメリカであれ、どこでもあるものだと思います。そこで誰しもが暮らしながらも、自分と異なる文化を持つ人とフィジカルに出会うことがあるのだろうかと考え、なかなか難しいと思います。そういった他者と出会うには例えば映画や小説などがあるかと思いますが、私たちはグラフィックノベル—漫画ではなく、どちらかといえば絵本に似たようなつくりのもの—を通じて人々に機会を提供していきたいと考えています。

では、グラフィックノベルでどのようなものを作っていこうと思っているのかと言えば、私たちが命名したのは「Social Graphic Novel、(社会派マンガ)」というものです。では、「社会派マンガ」とは一体何かと言えば、「リアルライフから紡ぎ出される社会派マンガ」と言って、2つの特徴を持っています。1つは制作の手法で、物語のモデルを決めたら、その人たちの背景をニュース、小説、映画、もしくはアカデミック・ジャーナルのなかでいろいろ調べて情報をまとめた後に実際に人々にインタビューを行って、それを基にフィクションあるいはノンフィクションを作り出しています。2つ目が、そうした人々のどういった視点から物語を作り出しているのかと言えば、特に「マイノリティや異文化を持つ人の新しい観点から見える社会」というものに着目しています。例えば同じ社会に暮らしていても、子供が見る社会と大人が見る社会、あるいはその国にいる人が見る社会と外国から来た人が見る社会では感じるものや受け止めるものが違って、特に私たちはマイノリティや異文化を持つ新しい人々の視点から捉えた社会というものをその社会のマジョリティの人々に共有していきたいと思っています。

次に、「リアルライフの人々の物語」とは一体何かと言えば、私たちバヴァアはリアルライフとは「日常」と捉えています。なかでも「日常」には2つあると考えていまして、1つは「普遍的なことが現れる日常」—どこの国の人であれ、朝起きて、ご飯を食べて…—というようなありふれたものや感情、感覚—、もうひと

つは、「集団の特異性が現れる日常」というもので、例えばイスラエルにはエチオピアからやってきたユダヤ人がいますが、彼らの語りには、他のヨーロッパからやってきたユダヤ人よりも経済的に苦しい状況に置かれていることがあらわれています。そうした2つの日常を織り込んだ物語を作っていきたいと思っています。

私たちの作品の向こう側には読者がいて、その読者はシンパシー（登場するキャラクターへの共感）とエンパシー（描かれている背景への客観的な理解）を醸成するように、私たちの作品では日常ということにこだわっています。

制作手法の物語作りについてお話していきます。私たちはインタビューが終わった後に、物語のコアのメッセージを決めた後、「言葉のネーム」を書き起こしていきます。イスラエル人のアーティストと共同で制作を行っているので、英語で書き起こしていて、この一つが漫画でいう一コマにあたります。また、その他どんなキャラクターがでるのか、そのキャラクターの表情、場面の背景など、一般的に漫画を読んだ時にコマの中に見える情報を、言語化した状態が「言葉のネーム」になります。

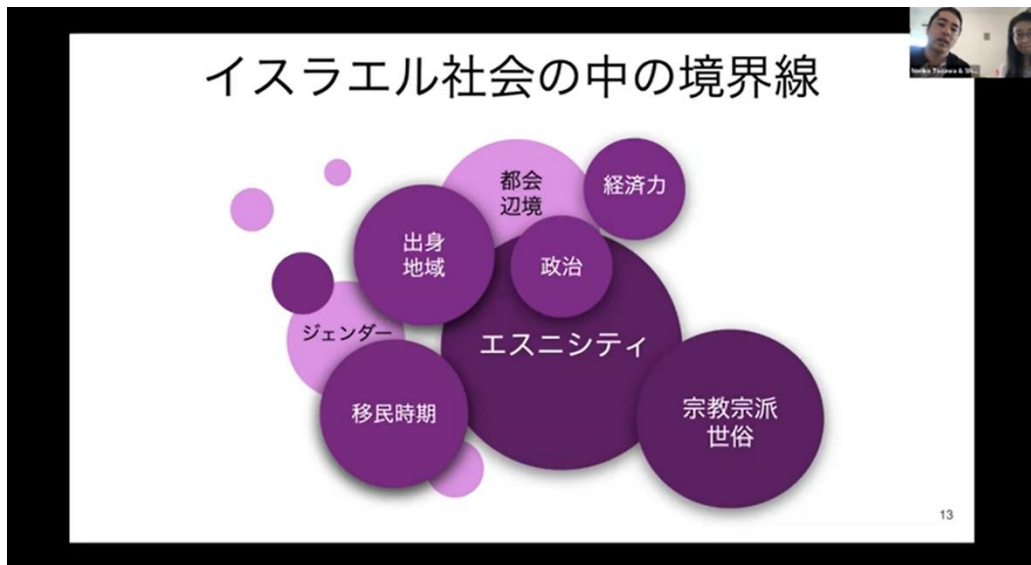
「言葉のネーム」が仕上がった後に、この物語を描くにあたってイラストレーターを選出し、相談しながら仕上げていく流れになります。このとき大事なのが、私（戸澤）と井川そしてアーティストが生まれて育ってきた文化の違いを、時には対立しながら、時には議論をして作り出していくことです。はじめにインタビューを行う際にもこうした交渉の場は生まれますが、この時さらに文化的な出会いや交渉の場面にさらされることになります。

それでは、ここからは「声たちが見える」という作品を紹介しながら、ここに現れる境界線についてお話していきます。「声たちが見える」はユダヤ教の一つのちいさな、エルサレムにある「デゲル・ヤフダ」（ユダの旗、の意）という実在するグループのお話です。ユダヤ教に関わる集団ゆえに特別な言葉もいくつか出てきますので、それらは脚注に説明を書いています。



* * * * *

井川：今読んでいただいた「声たちが見える」の中にイスラエル社会のこういった境界線が表現されているのかをお話します。まず、この図を見ていただくと、イスラエル社会には様々な境界線があることがわかります。



まず、「エスニシティ」は、ユダヤ人とアラブ人の境界線になります。「移民時期」や「出身地域」がありますが、いつ頃、どの地域から移住してきているか？が個人の社会的ステータスに影響することがあります。当然ですが、はるか前に移民してきたヨーロッパ系のユダヤ人はイスラエル社会で優位な立場にある、と言われています。その他、イスラエルではユダヤ教がとても大きな存在で、ユダヤ教の宗教者とそうではない世俗の人、という境界線もありますが、ここには時に大きな対立が生まれます。もちろん、宗教者のなかにも宗派の違い等で境界線は存在しています。そのほか、イスラエル以外の社会でも見られる境界線として、ジェンダー、都会出身か辺境出身か、経済力、政治などもあります。イスラエルでの政治的な境界線として大きなものは、パレスチナの土地を将来的にどのように扱っていくか（占領政策を続けるか、撤退するのか）という立場のちがいが深い亀裂になっています。

それでは、今回読んでいただいた「声たちが見える」の境界線の1つ目が、宗教者と世俗者の間にあるものだと思います。作品に登場する集団は、伝統派のユダヤ人で、彼らはユダヤ教の戒律を厳しく守っていませんが、緩やかに信仰をしているタイプの人たちと言われています。彼らの服装は、いわゆる宗教者のものではなく世俗派に近いですが、宗教的な儀式や祝日を大切にしています。作品のなかにも儀式の場面が登場しますが、これは宗教者としてよりもユダヤ教の伝統や教えを大事にしている、ということになります。

作品中の境界線の2つ目は、アシュケナジーvs ミズラヒ、です。イスラエル建国に携わったヨーロッパ系ユダヤ人でアシュケナジーと呼ばれている人々は、女性でも肌を露出した服で労働します。対して、中東や北アフリカ系ユダヤ人でミズラヒと呼ばれている人々は自分達の伝統を重んじ、イスラエル建国から歴

史を遡ると、ミズラヒはアシュケナジーから差別や偏見を持たれてきました。

境界線の3つ目は、ジェンダーです。本作品の主人公は、幼少時からユダヤ教を信仰してきましたが、宗教的知識を教育されたわけではありませんでした。主人公の女性は大人になって様々なコミュニティに属するようになって、女性としてリーダーシップを握りたいと思いつつも、周りにいるのが男性のリーダーでありロールモデルがいないという悩みを抱えます。

境界線の4つ目は、シングルマザーです。作品の中でも、周りのサポートのお陰で成長していくシングルマザーを描いています。

戸澤：これから、作品の中だけでなくイスラエル社会の中に見える境界線についてお話していきます。まず、イスラエル社会の境界線の1つとしては、移民集団内のベテラン vs ニューカマーというものになります。「アーク」のなかでは、移民集団内のベテランとニューカマーの関係性をポジティブに描きましたが、実際のイスラエル社会においては、建国前後の時期にイスラエルにきた人々は、自分たちがこの国を築いたという強い自負を持っていて、最近イスラエルにきた人々は“ラク”をしていると捉えているのだ、ということをよく耳にします。このように、移民集団内のベテランとニューカマーのネガティブな境界線も存在しています。

2つ目は、都市と周縁という境界線です。イスラエルの建国直後、第一次中東戦争が勃発し、イスラエルは周辺のアラブ諸国と戦争になりました。戦争が始まると、モロッコ、アルジェリア、イラク、エジプト等に住んでいたユダヤ人がイスラエルに難民として入ってきた＝ミズラヒームがたくさんいます。そのとき、イスラエルという国は既にヨーロッパ系のユダヤ人によって社会・経済・政治が動かされていました。この状況によって、中東・北アフリカからやってきたユダヤ人たちは、辺境の地に強制的に移住させられました。それはイスラエルの国土の北又は南であり、ほとんど砂漠の地であり、そこにバラック小屋のようなものが立ち並んでいるばかりでした。とうぜん、周縁の地に住まう人々の社会的な上昇というものは難しい状況にありました。そうした中で1970年代にアメリカで起こった公民権運動やブラック・パンサー運動につながりながら、彼ら自身のエスニック・アイデンティティーを勝ち取っていきます。しかし、2022年現在時点でも、アシュケナジーとミズラヒームの間の社会・経済的な格差は存在しています。

3つ目は、ディアスポラ・ユダヤ人社会とイスラエル社会というものになります。バヴァ・井川の自伝的な家族の歴史を追った作品である「ただいま」の中で、「家族や、親戚が経験したイスラエルへの移住の歴史を、俺は何も知らなかった」というセリフが登場します。これが示すとおり、たとえ同じユダヤ人であっても、例えば、イスラエルとアメリカという離れた土地に暮らす同じユダヤ人の家族であっても、その歴史や記憶は全く同じではありません。井川はこの作品の中で、親戚との対話を通じて、彼らがモロッコからイスラエルに移住した歴史や記憶を辿って自分の中に取り込んでいきますが、ディアスポラのユダヤ人とイスラエルの家族や親戚すべてができることではありませんので、それぞれの土地に住むユダヤ人たちが各々の記憶を持つことになり、同じユダヤ人でありながら、経験や歴史がなかなかつながらないということが起こります。

4つ目は、エスニシティになります。イスラエルには、ユダヤ系イスラエル人とアラブ系イスラエル人がいます。アラブ系イスラエル人には、イスラエルの建国後にイスラエルに残ったパレスチナ人もいますが、キリスト教徒のアラブ系またはドゥルーズやベドウィンといったイスラム教徒ですがまた少しパレスチナとは違うイスラムの伝統を持った人たちが存在しています。現在、イスラエルの人口の約2割がアラブ系

だと言われています。私たちバヴァの事務所があるテル・アビブについてはユダヤ系とアラブ系が緩やかに別れて暮らしているのですが、イスラエル全体を見ると、両者が混住している都市（Mixed City）があります。具体的には Yafo, Lod, Ramle, Haifa, Akko などがそれに該当します。これらの地域には2つのタイプがあって、イスラエルの建国以前からアラブ系の人たちがそこに住んでいて建国後もそこに暮らしている。そこにユダヤ人が入っていったことで集住化して言ったケースと、建国後、ユダヤ系住民が暮らしていた土地にアラブ系の人たちが暮らすようになったものです。2021年5月にイスラエルとガザで大きな軍事衝突がありました。その最中から、両者が混住する都市で大規模な小競り合いが、ユダヤ系とアラブ系の間で起こりました。この境界線も、イスラエル社会のなかでは深いものだと思っています。

5つ目は、ユダヤ人 VS パレスチナ人、になります。パレスチナ人は、現在、イスラエルが占領するヨルダン川西岸地区に300万人、一方で占領は解かれたもののいまだ封鎖が続いているガザ地区に200万人ほどの計500万人ほど暮らしていますがこうしたパレスチナ人たちが出会うのは、ほとんどの場合イスラエルの軍人であって、ユダヤ人とパレスチナ人が自然な形で出会う機会はあまりありません。私たちの本で紹介しているイスラエル人アーティストの一人、ギラッド・セリクターは、実の姉の軍隊での体験をグラフィックノベルとして制作しました。ギラッドの姉は養鶏所で働いていたのですが、軍への入隊のため養鶏場を離れることになり、ここで一緒に働いていたパレスチナ人がユダヤ人である彼女に餞別としてカセットテープを渡す、という場面です。実際、ユダヤ人とパレスチナ人の関係は白と黒で分けられている、分けられて見られていることも多いのですが、個人のレベルで見た場合、境界線の中にゆらぎが見える、ということもあるのです。ギラッドの作品「Farm 54」の中でも、大きな集団同士の対立のなかにみえる個人同士のつながりについて描いているところがあります。

今まで、私たちの作品に見える境界線と、イスラエル社会にみえる境界線についてお話してきましたが、大きな社会の中で見れば、その境界線は揺らがないもののように見える一方で、個人というレベルに焦点を当てた場合、その境界線にはゆらぎが見える、黒にも白にも分けられないグレーな部分を見ることができます。こうした視点をもちながら、今後も作品を作り続けていきたいと思っています。本日はご清聴ありがとうございました。

濱中：バヴァのお二人、どうもありがとうございました。とても詳しい解説で、画像もたくさんあり、視覚的にも楽しめました。ここから、質疑応答に移ります。

質問者1：お二人ともどうもありがとうございました。私のほうで伺いたいのは制作段階で、お二人とイラストレーターの間で交渉しながら作り上げていくということでしたが、どのようにして折り合いをつけていくのでしょうか？

井川：私が一番記憶に残っている話し合いは、「声たちが見える」のなかには様々な人たちが助け合う場面が登場しますが、そこにどれくらいの人数のコミュニティーメンバーを見せるのかという点で、コミュニティーの人たちや僕らは出るだけ多くの人たちを登場させたいという気持ちがありました。しかしアーティ

ストは、限られた時間と資金の中で誰もかれも表現することはできないという想いもあったと思います。また、「みんなを見せたい」というどちらかと言えば中東や日本的な価値観と、個人を見せるというヨーロッパ的な価値観の違いもあったかと思います。結果的には、主張と妥協を両方していて、気が付いた時には丸く収まっていた、という感じです。そこに行くまでは、ユニットとしては悩んでいました。

戸澤：イスラエルは移民の国なので、漫画の描き方もヨーロッパ風とアメリカ風の折衷の仕方が個人によって違う、ということがあります。「声たちが見える」では、アーティストがアメリカ風、私たちバヴアはどちらかという日本の漫画のようなコマの使い方を想定していたという違いがありました。結果的にアーティストが納得してくれて、私たちが思っていたような、細やかに心情を表現していくという方向性になりました。

井川：このアーティストは、「間の取り方が日本的で、僕がやってきているスタイルではない」ときっぱりした態度でしたが、僕たちは実際にインタビューをとってきたという自負があったので、「インタビューの時、こんなふうにゆらぎが見えた」と言いながら、議論を重ねて納得させることができました。

質問者1：どうもありがとうございました。

濱中：フロアからでないようでしたら、私のほうから質問をさせていただきます。日本で、グラフィックノベルの手法をとった本を出版された理由について、伺いたいです。

戸澤：当初は日本の読者を想定していたわけではなくて、幅広い方に読んでいただきたいと思っていたので、はじめはグラフィックノベルを英語で制作していました。これをなぜ日本の読者の方にお伝えしたかったのかというと、日本ではイスラエル・パレスチナについては国際政治などの限られた分野でしか情報が広まっていないというところがありましたので、もっとイスラエルの人々の日常に触れていただきたいと思ったからです。グラフィックノベルの強みは、映画とは違って自分のスピードで読めること、つまりそれは自分と対話をしながら読むことにつながると思います。こういった意味でグラフィックノベルはシンパシーとエンパシーを醸成する優れたメディアだと考えておりまして、このような理由から、日本の読者の方々に漫画でご紹介したいと考えました。

濱中：どうもありがとうございました。では再びフロアの方からご質問をお願いします。

質問者2：エピソードのもとになった人はどのように集めたのかが気になりました。どういう基準で選定したのか、そこに葛藤はあったのかについて伺いたいです。

戸澤：ある時期から井川が特にミズラヒームのユダヤ教に関心を持って勉強会に参加し始めました。その勉強会でご縁があって、繋がりを作ることができました。ですがこういうケースでは信頼関係が結ばれないとインタビューをすることはできないので、そこにたどり着くまでに1年以上はかかりました。また、ウクライナの移民の方については、ロシア系移民をサポートしている NGO を通して、その方たちからご紹介

介をいただく形で知り合いました。インタビューではかなり個人的なお話を聞くことになるので、人間的なつながりや信頼関係がないとなかなか難しく、葛藤というよりもまずはインタビューアーを見つけるというところが大変でした。

濱中：どうもありがとうございました。では最後に、IG 科研・研究代表者でおられる長沢栄治先生から、閉会の言葉をいただきたいと思います。長沢先生、よろしくお願いいたします。

長沢：本日は豊かな内容で大変勉強になりました。どうもありがとうございました。みなさんもお覧になったかもしれませんが、ドキュメンタリー・アニメ映画の「戦場でワルツを」を拝見して、イスラエルの漫画・アニメのレベルが高いなと思っていたところでしたが、今回のアーティストの作品を見て再度そういう印象を受けました。本日のご発表では、「日常性」というのが一つのキーワードで、「日常性」というのは、通常は一部の地域を除けば平和な暮らしで、平和な暮らしの陰に社会の影や歴史の影とかがあるという社会派の漫画かなと思って見ていました。今回強調されていた「境界線」について、取り上げられていたジェンダーやエスニックなどが一体どう結びついているのかを研究するのが現代の多くの研究者の課題だと思います。アンジェラ・デイヴィスをはじめとして「インターセクショナルティ」という言葉が最近流行っていて、「交差性」と訳していましたが、そうするといろんな問題がただすれ違っているだけということで、実はそういった様々な分断や差別の問題が根底でどのように結びつき合っているかということを明らかにしなくてはいけないと思っています。

この「イスラーム・ジェンダー学」というのは、「イスラーム」と「ジェンダー」の間にある「・」にいろんな問題を入れてみると大きなことが深く言えるのではないかと言ったことがありました。実際に勉強していくと、いろんな問題を結び付けるイスラームやジェンダーをめぐる様々な分断があって、さらにほかの階級やコロニアリズム、もちろんパレスチナ問題もそうですが、そうした問題の境界線が実は絡まりながら結びついているということを明らかにする学問の試みということです。さらにはインターセクショナルティという概念そのものは応用的に現実的に対応していかななくてはならない問題だという意識を持ちながらやるという点で、今日のお話も、ご本もそういう方向性を向いていたのだと思います。ただその場合には境界線が揺らぐだけではなくて、それを超えていくためには違う枠組みみたいなものも必要かなと思います。もちろん、個人の生活を見つめてそこから境界線のゆらぎを目指して、その線が揺らいで大きく壊れて、新しい社会が作られればよいのですが。揺らぐだけで終わってしまうと、かえってその線が強化されて分断が作られるということも多いような気がします。

そうということで、今日のお話は、イスラーム・ジェンダー学の第2期目は来年終わるところで、あと2年間と言うところですが、私の個人的な考えとしてはそのようなところで、長い展望を見据えた研究を皆さんと協力してやっていければいいかなと思っています。コロナを機に始めた巣ごもり読書会ですが、今後この場を通じてみなさんと知的な冒険をあと2年間やっていければいいかなと思っています。今回は今年度最後の巣ごもり読書会でしたが、いろんなことを考えさせていただける貴重な会を作っていただいたと感謝しております。戸澤さんと井川さん、どうもありがとうございました。

濱中：長沢先生、お話いただきどうもありがとうございました。

それでは、会を終了させていただきます。本日はご参加いただきましてありがとうございました。